

見えてきた八代的「妙見」のすがた

講座コラム①で述べたように、「妙見」とはもともと仏教的概念。4世紀の中国で訳出された「妙見」の根本経典『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』により、妙見はそもそも「菩薩」として位置づけられていた。よって、古代日本においても一般に「妙見」は菩薩の一種と認識され、そのイメージは他のノーマルな菩薩と同様、穏やかなものだったようだ。今回、唯一熊本県外からの出品となった平安時代の木造妙見菩薩坐像（大分県中津市本耶馬溪町青区蔵）や、本展覧会図録に図版掲載した鎌倉時代の「妙見菩薩図像」（醍醐寺蔵、展示は写真パネルのみ）に見える像容は、当初日本で受容された「妙見」イメージをうかがう上でとても貴重である。

その「妙見」のすがたが鎌倉時代以降、徐々に変容していく。妙見菩薩像の変容過程に注目した山下立氏は、平安時代（12世紀）の木造大將軍神像（大將軍八神社蔵、本展覧会図録に図版掲載、展示は写真パネルのみ）が、鎌倉時代以降の妙見菩薩の新たな造形に影響を与えたと指摘している。その新たな造形の特徴は、①披髪（髪を結わない）、②着甲、③亀蛇に乗ることだという。

※山下立「妙見菩薩の変容―千葉・個人蔵銅造妙見菩薩像懸仏の像容の検討を中心に―」

『密教図像』第18号、密教図像学会、1999年

この山下氏の指摘に注目して八代地域の妙見菩薩像をほぼ網羅的に調査研究した当館学芸員の石原浩は、本展覧会準備過程において、八代で現存している妙見菩薩画像・彫刻がおおよそこの3つの特徴を満たしていることを明らかにした。石原によると、着衣については、甲（鎧）をまとう像、唐服をまとう像、あるいは甲の上に唐服をまとう像がある。手には剣を持ち、持ち方は頭上にかざす、胸前で上向けに持つ、剣先を地に付けるパターンがある。

具体例をいくつか紹介しよう。写真右上の木造妙見菩薩立像（個人蔵）はかつて八代妙見宮の神宮寺に祀られていたもの。確かに髪を結わず垂らす、着甲姿（さらに唐服も重ね着）で剣を所持、足元には亀と蛇（玄武）。見事に先述の3つの特徴が当てはまる。本展覧会ポスターや図録表紙にお出ましいただいた、容姿端麗な木造妙見菩薩立像（植柳妙見宮蔵）も同様だ。

これらは彫像だが、絵画でも傾向は同じだ。写真右下の妙見尊像（当館蔵）も八代に伝来したもの。左手に宝珠を持ち、右手の剣は上向きなどの相違点はあるが、やはり先の3つの特徴が当てはまる。講座コラム①に掲載した鹿乱妙見尊像（当館蔵）も合致している。

残念ながら、八代地域に残る妙見菩薩像は江戸時代以降のものばかりで、中世にさかのぼる遺品は今のところ確認できていない。なので、今述べた江戸時代の八代的「妙見」の姿がどうやって形成・定着したのか、その過程解明にはまだナゾが残る。

しかし、正直に言って私自身もこれまでは「妙見さん、はガメ（亀蛇）に乗っている神様」ぐらいのざっくりしたイメージしか持っていなかった。それが、こうして作例を集めることにより、ようやく八代的「妙見」の具体像が見えてきた。大きな前進だ。

八代地域の妙見菩薩像の図版やその詳細な解説は、展覧会図録に凝縮して掲載している。ぜひ多くの方々にご覧いただきたい。そして、できればご購入いただきたい（要するに図録の宣伝です）。

【主幹（学芸員） 鳥津亮二】



妙見宮神宮寺伝来の「木造妙見菩薩立像」
江戸時代（18世紀） 個人蔵
出品番号 32



「妙見尊像」
江戸時代（18世紀） 当館蔵
出品番号 25